

翁久允「安孫子久太郎翁と私」

―自筆原稿の翻刻と解説

須田 満

はじめに

本稿は、日米新聞社社長であった安孫子久太郎（一八六五―一九三六）の伝記を出版しようと考えた在米の岡繁樹（一八七八―一九五九）からの依頼で翁久允（一八八八―一九七三）が一九五六年九月に執筆した三十一枚ペン書き原稿「安孫子久太郎翁と私」の初めての翻刻と註釈である。

安孫子久太郎は、新潟県水原村（現・妙高市）で生まれ、一八八五年、二十歳でサンフランシスコ福音会の援助で渡米し、新聞経営と同時に日本人移民の永住を目指した農業コミュニティ作りを目指した人物である。

岡繁樹は、高知県安芸町（現・安芸市）生まれで、一八九九年「萬朝報」に入社し、幸徳秋水、堺利彦と知り

合い、一九〇二年に渡米。サンフランシスコで金門印刷所を経営する傍ら、平民社のメンバーとして在米社会主義者の拠点^二となった。第二次世界大戦中は、日本人収容所に入ったが、一八年にアメリカ政府の要請でインド・ビルマ戦線へ行き、ビラを巻いて日本軍の降伏工作を行った。

翁久允の最初の渡米は一九〇七年でありワシントン州のシアトルやブレマートンで^{スクリューボーイ}学 僕をしながら邦字新聞に小説や評論を発表していたが、一三年に一時帰国して結婚した翌年からは定職を求めて南下してカリフォルニア州サンフランシスコ周辺のコミュニティでの生活を開始し、雑誌や新聞の編集に関わりながら著作の幅を広めていった。一五年に開催されたパナマ・太平洋万国博覧会の前後に翁は二人と知り合うことになった。

久允は、安孫子の追悼文「安孫子さんの思ひ出（一）」（四）を日本から「日米」^三に寄稿し、また岡繁樹の追悼には『井伊大老』と其著者の思ひ出^四を書いており、二人との深い交友があったことが判る。

本原稿に関して、久允は一九五六年九月六日付の「太稚庵日誌」に「安孫子久太郎」の原稿と題して次のよう

に記している。

在米の岡繁樹が日米新聞社長だった「安孫子久太郎」という本を出すので、それに交友及感想を書い
てくれと原稿用紙をおくつて来たから早速書き出し
三十枚ばかりでまとめる^五

また本原稿の最終ページには、次に引用する岡繁樹宛
の手紙が添え書きされている。

岡繁樹君

原稿用紙が届けられたので、十月頃に出版ときい
ていたし、おけると迷惑されるだらうと思ひ、早
速書き出したが、まとまりもつかないようなものにな
った。

しかし、私の見た安孫子久太郎として一隅にのせて
くれ玉へ

本が出来たら一部おくつてくれ玉へ

他からもいろ／＼の見方が届くであらう。しかし、
書くような人々が多く亡くなった。

記事中まちがったところでもあれば訂正して下さい。
い。

九月八日、

十月十一日着^六

本原稿を含む岡繁樹が依頼した『安孫子久太郎』用の
原稿は、岡の病氣と五九年の死によって公開されること
がなく、岡の死後カリフォルニア大学ロサンゼルス校図
書館に寄贈され Shigeki Oka Papers, 1914-1957(sic.)^七
として保管された。

その原稿の存在を広く知らしめたのは、岡繁樹の甥で
カリフォルニア・ファースト・バンク日米資料室室長であ
った岡省三が、一九八〇年に叔父繁樹が残した資料を基
に「在米日本人の今日あるを夢見その生涯を捧げた先覚
者 安孫子久太郎伝」及び“Biography of Kyutaro Abiko:
Isei Pioneer With a Dream”を「北米毎日新聞」^八に連載
したことによる。この評伝には本稿原本の一部が引用さ
れている。

岡省三の評伝の存在は、翁久允の英文評伝^九の著者で
ある鳥本幾子氏からのご教示、本原稿の複写物は水野真
理子氏からご提供、また翻刻作業には、逸見久美氏から
助言をいただいた。各位に感謝申し上げます。

表記について

本稿では、原則として原本の記載、形式をできる限り再現した。原本が執筆された一九五六年頃は新旧仮名遣い、新旧漢字が混同していた時代であり、翁久允も新仮名遣い、新漢字で書こうと試みているが、結果として混同が生じている。本稿では、仮名や漢字の新旧のいずれかへの統一は敢えて行わず、原本表記を優先した。

一 漢字は、旧字体のものも含めて、フォントの可能性限り原本記載の通り表記する。

二 変体がな・漢字で難読と思われるものや越中人である翁久允の「い」音と「え」音の混同と思われる部分には「」内に仮名を付した。

三 かな遣い、送りがな、拗音・促音の表記は原本記載の通りとする。ただし濁点がなく難読のおそれがある場合は濁点を補う。

四 おどり字は、原本記載の通りとする。

五 振りがな・傍点・傍線は原本記載の通りとする。

六 補いうる脱字並びに空白箇所、補足事項は「」で補う。また、単純な誤字と思われるものには、^マを附す。

七 筆者には判読不能な文字は、□とする。

(文中には、今日の人権意識に照らして不適切な表現がみられるが、時代背景や記録の性質、著者や登場人物が他界していることなどを鑑み、原本通りの記載とする。)

安孫子久太郎翁と私

翁久允

千九百十五年、桑港（ロンドン）に世界大博覧會^{一〇}が開催されると言ふので、その頃までシヤトル^二にいた私達にハ桑港は大きな魅力であつた。そして遂にその魅力に誘はれて私も南下したのだが、第一に訪ふたのハ新新聞^三の松原木公三君であり、次に日米新聞の山中曲江^四君であつた。二人ともシヤトル時代の先輩で、木公さんは新世界の、曲江さんは日米の主筆であつた。何よりも最初に感じたことハシヤトルに比べて桑港の同胞社會ハ老成していたことであり、それだけ日本化し、そして風俗習慣にも日本の情實が濃厚であつた。それハカリフオルニヤ州全体の同胞労働者農民の年齢ハシヤトルを中心と

したワシントン州よりも十五年乃至二十年ほど高く、そして布哇移民が多かつたから農園の地盤などハ北方よりも堅く、その為め排日の嵐が強く、排日問題の中心地でもあつたからである。だからシヤトルから見ると苦勞人型の人が多く見受けたが同時に文化程度と言うか知識程度というか、さういつたものがシヤトル地方の連中より低いように受取れた。

桑港にハ御三家というものがあつて、それは日本を背景とした一大勢力で、即ち総領事館、三井物産、東洋汽船會社^{一五}の三代表者であつた。あとから正金銀行^{一六}なども同格になつたが、これらの殿様のな存在は加州同胞を領民的に見下ろしていた。かうした日本の封建的な感情を色づけたグループを背景として在米日本人會は加州各地域の日本人會を統一していた。そしてその會長はポテト・キングの牛島謹爾^{一七}であつた。牛島はパークレーに豪壯な邸宅を構え、スタクトン河下の開拓者として全米的に著名な人物であつたし在米同胞社會から見ると傑出した成功者あつた。彼は「別天地」^{一八}と號して漢詩を嗜^{一九}み、その詩篇を蒐めて上梓^{二〇}したほどだから思想的にハ全く東洋人であつた。風貌も立派であつたし、ジヨウ

ジ・シマと言つたら米人と相併^{二一}んでも遜色がなかつた。総領事館ハ勿論のこと御三家御四家とハ密接な關係があり、在米日本人會は、だから日本のスパイでないまでも、日本の御用機関化していた。それハ會長牛島の人柄に適していたものであつた。

ポテト・キングであつた牛島謹爾は同時にジャパニーズ・キングでもあつた。日本からの高名な陸海軍大將格や総理大臣以下の大官を初め大實業家、學者、其他當時の欧米視察者もしくハ研究家でこの牛島謹爾を訪^{二二}ハな^{二三}いものハ殆どなかつた。しかし、彼らハ牛島と接してその尠大な農園を見せられたり、邸宅で晚餐の歓迎を受けたりはしたけれど、日米關係や日本移民の運命や、排日問題への對策やについては彼から何をも聞くことが出来なかつた。さうした問題については是非逢つて見なければならぬ人物ハ他にあつた。それは日米新聞社長安孫子久太郎^{二四}であつた。

在米日本人會長など言ふ位置は當然この安孫子久太郎のような人を据えておくべきであつたが、彼にハ據大なる理想があり、思想が進歩的であつたために所謂御三家や、そして布哇移民的保守系にハ餘りにも飛躍していた為め、

一般的にハ容れられなかった。しかし、進歩的な青年達ハ安孫子の膝下に集つた。日米新聞はその為め發展し、新世界新聞ハ創立が古かつたけれど逆にこれに及ばなかつた。この二つの新聞の流れが加州においてハ對立の姿となり、あとから多少の變化があつたけれど日米新聞は反御三家的となり、新世界は支持派となつた。

反御三家的な思想ハ當然反日本的に解された。安孫子ハクリシチャンであつた。そして在米の保守的移民の多くハ佛教徒であつた。そして在米日本人會を初めとして各地域日本人會の幹部級ハ殆どこの佛教徒的保守派で占められていた。これに反して基「督」教徒でなくても進歩的な青壯年達ハ議論は上手であり、筆も達者であつたが、實力的にハ佛徒的保守派に叶はなかつた。世界のどこでも人情ハ一つで、金のある方へは愚象がついてゆくものである。安孫子久太郎の日米新聞は發展して行つたが社長自身はいつも貧乏だつた。その貧乏も日米の財政から言つたら貧乏な筈がなかつたのだが、理想家であつた彼ハ金が出来ればいつもその二倍も三倍もの計画を立てるのであつた。それハ私慾的なものではなく、日本民族將來の發展と言つたところに眼目があつた。

恰度私が南下した千九百十五年の二年前は日本人士地所有禁止と言つた排日法案^三が制定され、その實施前にリビンクストンの荒野を買ひ込み「ヤマト・コロニー」^三と稱して所謂新しい村作りの計画をたて、進歩的な青壯年を選んで開拓したのであつた。かゝる計画ハ當時の御三家的な、そして保守的な在米移民の頭には無鐵砲なことであつた。彼らハ日米戦争を豫想していたし、又米國へ來たのハ稼ぎに來たので永住するつもりハなかつたのであつた。しかし安孫子ハ米國へ來た以上は米國の土と化する。そして日本民族の根をはやすと言ふのが考え方の基本であつた。

牛島は土地を借りて農園を開拓し、それで儲けて富を作るというのが主義であつたが、安孫子ハ土地を自分のものにしてそこに根をおろす。その為め十年内外ハ苦勞せねばならぬ。苦勞を^し凌^じいだら他日必ず成功者となれるという主義だつた。が、最初ハその説に惚れ込んで青壯年達ハ入植したが中々終りを完了せ得なかつた。中途でボロ／＼かけて行つたり、又堪えられない苦勞に悩んだ結果安孫子を恨む聲も出て來た。さうなると、「それ見たか」と借地で一時的な百姓をやつている人達や保守的

な人達からハ嘲あざわらけられた。そして世界大博覽會が桑港にあるという華やかなその年でも、安孫子の財政的窮狀ハその極にあつたのであつた。しかし、彼ハその窮狀をオクビに出さなかつた。そしていつも樂天主義を振り舞いていたのである。その餘りにも樂天的なのに彼の膝下に集まつた有能な青壯年達の中でも見切つて日本へ歸つたり、他に轉じたりしたものがあつた。

私ハ初めて安孫子久太郎という人物に逢つたのハ山中曲江夫妻と共に一夕晚餐に呼ばれた時であつた。若い時には何でも働らいて來たと言つたような大きなガツチリした手で私の手を握り、柔和な笑を両眼の目尻に湛たえ、口髭も頭髮も半白になつた小肥りの堂々たる偉丈夫的な紳士であつた。そして夜更くるまで大和植民地論ヤマトコロニーを聞かされたのであつた。シヤトルの書生生活から、初めて桑港に下つて來た私にハその所論や趣旨ハよく呑み込めなかつた。しかし山中曲江ハもう六七年も前から來ているのだから、社長の理想とするところが解つていたし、それに共鳴して毎日の論說なども書いているのだから、私

のわからないところを補足してくれたりした。何かしら、私はこの人物にハ尊敬すべき大きなものがあるような感じをもつてわかれ、そして加州でハ最初の職業地であつたスタクトン^二に行つたのであつた。

スタクトンに佐伯便利社^{三四}というのがあつて、新世界の松原木公の推薦でその社が出版している「太平洋」^{一五}という雑誌の編集者としてやつて來たのであつた。佐伯社長^{二六}ハ郷里廣島で印刷所をもつており、そこで發行する雑誌を加州に散布している廣島縣人^{二七}に賣り込む為めアメリカで編集すると言つたものであつた。そこへ行つてみると、サンオーキン河の所謂河下^{二八}というところはポテト・キング牛島の大農園であつた。ところが、その河下の一部に農園を經營していた林甚之丞^{二九}と言ふ短身小軀^{三〇}ではあるけれど、この地方の進歩的、文化的な青壯年の中心となつている人に逢つた。彼ハ安孫子久太郎黨であつた。そこで日米支社や、教會を中心として私達が一つのグループをつくつた。そうしたグループをたどつて桑港からいろ／＼な人がやつて來たが、それが所謂日米系の人達だつた。だん／＼わかつて來たことは、シヤトル時代にハ殆ど觸れていなかつた思想回訪が加州の

一部に潜行的だったことであつた。シアトルの若い連中は文学的だったが、桑港を中心とした加州は文学的と言ふよりか思想的だった。それハ幸徳秋水^五とか片山潛^六とか河上清^三などの影響があつたのである。そして安孫子さんハ社會主義者ではなかつたが、彼らの進歩的な議論を容れていたのである。だから彼らの出入りも許していた。さういう雰囲氣が、保守派方面から疑の目をもつてすると、安孫子一派というものハ祖國に反逆心でも抱いてるように見えたのであつた。

當時在米同胞社會にも日本のスパイ的な存在があつて、社會主義的傾向のあるものを密告して彼らの何かの爲めにしようとしていた。それによつて日本でハブラツクリストが作られ、総領事館から各地の領事館へ手配されていた。安孫子社長はその統領のように沙汰されていたのであつた。しかし、安孫子自身にも、彼を中心とした進歩的な青壯分子にも祖國への反逆心どころか、只管日本民族の海外發展策が眞劍に考えられていたのであつた。とかく日本人は内地でもさうだが、進歩的な思想をもつたものをすぐ國賊的に判断する頑迷な保守性があつた。在米同胞社會でのさうした一黨と言ふか一派と言つたも

のハロクに英語もしやべれないし、英字新聞さへ讀めない連中で、日本の講談本を耽讀したり、日本からおくつてくる新聞や雜誌しか讀んでいなかった。そして物の考え方ハ日本中心主義で、世界と言つたものに目を開かうとしなかつた。さういつた意味で安孫子久太郎は彼の時代の同胞中でも米人と膝を交えて自由に會話することも出来、いつも進歩的な英書や雜誌などよんでいた。家庭でも余奈子夫人^三ハ津田梅子女史の妹さんであり英語は自由であつた。米人の有名な牧師や学者や政治家などが來て講演などやる時ハ夫婦で必ず聞きに行つた。桑港にハそんな家庭は一つもなかつた。

安孫子さんハ所謂親日家と稱する米人の實業家や政治家や其他の人々と交際ハしていたが、その人達に心服はしていなかつた。それハ彼らハ日本と結んで何かの利益を得ようとしているものか、たゞ漫然と日本が好きだと言つた贅沢な連中だつたからであつた。だから彼ハ寧ろ排日政治家と往來して彼らの意見を質するに努めていた。そして排日家の言ひ分にハ米人としての眞劍さがあり、彼らの説を理解して日本及在米問題が反省すべきだと言うのが結論であつた。さういう議論や態度と言ふものハ

頭から排日家だと言えば敵視したり、彼らの議論を理解しようとしなない連中にとつては國賊的に見え、又スパイ的に見えたのである。しかし、安孫子さんハ日本の政治が墮落し、外交に方針なく、たゞ軍部が威張つてるだけの状態に對しては眞面目な憂慮を抱いていたのであつた。だからと言つて日本に革命を起こすような運動をやらうなど言ふ氣もちがあつたのでなく、在米同胞ハさういつた祖國にたよらないで、在米同胞自身の手によつてこの移民地で成功し、移民地を植民地化すべきだ。在米同胞が日本を頼つているから排斥されるので、米國に同化したら農園経営でも各種の労働でも他民族より優れている日本人だから必ず排斥を喰^⑤えとめることが出来る。それをやらねばならぬと言ふのが持論だつたのだ。

ところが在米同胞の大部分ハ相変らず出稼^⑥根性であり、永住の觀念がなく、儲ける金ハ正金とか住友其他の銀行機關を通じて日本へ送金し、残つた金で生活しているから同胞社會の日常生活は貧弱であり、それが排日の種ともなつた。日本でハ米國での稼ぎ金を少しでも送らせようとしており、そして諸銀行の支店がその手先きとなり、領事館などハ在米同胞の爲めになることよりも、

日本の利益になること以外何も取扱ハなかつたのであつた。それが安孫子さんの不平であつた。日本人會ハさうした領事館を中心としてその下部的なものに化していたからさうした機關にハ最初ハたゞさわつていたが遂にハ顔出ししなかつた。そして牛島謹爾を中心として旧態依然とした日本人會が續けられたのであつた。

私ハスタクトンにいて時々桑港にゆき、又林甚之丞君などを通じて加州の同胞社會の實情をあらまし知り得た。スタクトンから一時間餘りの電車でサクラメントに行けたが、その中間にフロリン^⑦と言ふ村があり、この農地は日本人土地問題で騒ぎを起こしたところだつた。サクラメントは州廳のあるところで、その市や河下地方を中心として三四千の同胞がいた。スタクトンよりも多かつた。そこに日米新聞の支社があつたが、鷲谷南強^⑧という人が長をしていた。彼ハ安孫子幕下の偉才だつたが、前に言つた思想的に密告され、幸徳秋水一派のものとされた。祖國の官憲筋が彼の身を調査するやら内偵するやらし、それが日米新聞、強いてハ安孫子社長の身邊にも累を及ぼすと言つたほど緊迫して來たので彼ハ桑港からメキシコに飛んだのであつた。當時メキシコには内亂

が起こつていたが彼ハカランザ將軍^{三五}の幕僚となつて活躍をやつていたが、病を得て歸つて來たのだ。歸つてハ來たが元の日米本社に行くとの前の關係もあり、と言つて安孫子社長ハ彼を何とかせねばならず、そしてサクラメントへ廻はしたのだが、彼ハさうした來歴の持主であるから一般同胞から見ると頭抜けた風格をもつていた。頭腦ハ明晰であり筆力も爽かであり、話術にも長けていた。日米支社を中心としてゐるんな連中が集つたが、その中でも鷺津尺魔^{三六}と言ふ偉丈夫があつた。彼ハ安孫子久太郎と同縣の新潟人で、安孫子の性格ハ呑み込み、文章が達者で、多くは安孫子の代筆をやつていたが、何處で勤めたと言ふこともなく、何を働らいたと言ふ形蹟もなかつたがいつも酒に浸つていた。そして暇と相手さへあれば碁を打つていたし、それでいて何處へ行つて「も」尺魔尺魔と言つて人から慕はれ、金に窮したら安孫子から貰つていた。南強ハ尺魔のようならしなさは少しもなく、常にネクタイをきしりとしめ服装なども整えていた。日米本社ハ山中曲江によつて編集はガツチリと固められ、各地域の支社ハそれぞれ傑出した人物を配されていたから日米新聞の勢力は桑港世界博以來同胞社會に大

きな地盤を作り出した。

それは千九百十五年から七八年かけての時代で第一次大戦の眞最中であつた。日本ハ聯合軍として米國と結んでいたから排日運動も鳴りを静めていた。その間に日米新聞ハ益々發展したが、當時朝鮮とか滿洲などにも日本の新聞社^{三七}があつたが、さうした海外同胞社會の新聞としてハ日米は信用の上からも財力の上から第一位と稱せられていた。安孫子社長ハ人生として働らき盛りの頂上に來ていた。そして彼の願望であるリビングストンの大和植民地を完成しようとあせり初め、其他各方面に手を伸ばした。それハ日米の財政から見ると無理な計画ばかりであつた。しかし社員ハ社長の理想を完うさせようとして忠實に働らき応援したが、戦争も終り、再び排日運動が抬頭して來て社長の意図が狂ひ初めて來た。

私はスタクトンからオークランドの日本人會幹事としてやつて來たときハオークランドの支社長をやつていたのハ島内逆浪^{三八}と言つた佐賀人で日露戦役のときハ中尉とか大尉とかだつたと言つた硬骨漢で安孫子の參謀役だつた。彼ハリビングストンの外にソーテツ植民地^{三九}を始めたので社長の理想を實現すべく去つたあとへ私に來て

くれと言うことになり引受けたのだが、桑港とハ一幕「衣」帯水のところだから、安孫子さんハ暇がありさへすればやつて来て夜が更けてもストーヴの前の安楽椅子に腰かけて氣炎を上げて行つた。いくらきいても盡きない彼の話題であり、結局ハ日本民族發展策であつた。理想論が焰々述べられて限りが無いのだけれど、安孫子さんのやつて来た動機は金策であつた。しかし、その金策のことを少しも言ハないで氣炎が終ると歸つて行くのであつた。

正金でも住友でも其他の金融機関のものに對してハ安孫子さんハ常に例の理想論を説くものだから誰も相手にしなかつた。彼に敬服し彼の理想のわかる者にハ金が無かつた。そして彼ハ誰か金を出すものがないだらうかと方々飛び廻つた。少し位のお金でハ焼石に水なのである。そして彼の生活は質素そのものであり、洋服などもドレスはしているが何十年も着たりしたものだつた。

餘りに金に困つて来たから、私は毎年出版している日米年鑑^{四〇}と言ふものゝ外に「在米同胞人名辭典」^{四一}と言つたようなものを作つたらどうだらうかと提案した。そしてその計画をたて、報告したところ社員の多くハ最初

反對だつたが社長はやれ／＼と言ふものだから遂に決行したら相當の利益を得ることが出来た。そこでワシントン會議^{四二}が催されることになつたので私ハ特派員^{四三}としてゆくことになり、社長もあとからやつて来た。ワシントンでハ徳川公爵^{四四}を初めとして全權の加藤友三郎^{四五}、幣原^{四六}、植原^{四七}の大使、総領事、そして日本からやつて来たいろ／＼人物と面會したが、安孫子さんの態度ハそれら高官や紳士達と對して何らの遜色がなく、米國の事情に通じていない彼らに忽々とそれを説くのであつた。

在米同胞社會でこのような態度を持し得る人ハ外になかつた。牛島謹爾さんにしても、富豪としての態度ハ持し得たかもしれないが知性の點でハ及ばなかつた。

安孫子と言つたら米國にいる危険人物だと多年睨んでいた日本のその筋の疑問はこの頃から薄らいでいた。安孫子さんハ明治十八年代に渡米し、日露戦争前に一度歸つて結婚し、再渡米して以來亡くなるまで歸らなかつたのは、安孫子が歸つたらひつ捕えようとまち構えていた警察があつたからであつた。

日米新聞の財政ハ行きつまつてゆくと、多年安孫子の幕下にいた青壯年の霸氣ある人々は自然と散り散りにな

った。社長の理想實現の困難に挺身しようとする氣力も失はれて來たのであつた。又、長ずるに及んで意見も合はなくなつて來た。そして有為な人物ハ彼の膝下から去り、多くハ歸國した。私ハ最後まで社長と運命を共にする覺悟でいたけれど関東大震災の翌年^{四八}、父が大病だから歸れと音信され、一時的なつもりで歸國したのだつたがそれきり日本にとゞまることになつた。

八年の後^{四九}、私ハ朝日新聞社をやめてアメリカからヨーロッパを廻り、印度を経て歸つてくる計画で画家の竹久夢二^{五〇}をつれて桑港に上陸した。二人で世界漫遊と繪と文の著書を出版する豫定だつたのである。久しぶりで先づ安孫子さん夫妻に逢つたのだが大いに喜んでくれた。そして社員の多くハ変わつていたが、中には古參も残つていたけれど八年前と内部の雰圍氣が殆ど變つていた。

同時に同胞社會も變つていたし米國そのものも以前の如くでなかつた。私の在日八年間ハ大震災後^{四九}滲^{ソウ}漚^{ソウ}として起つて來た東京を中心としての民主主義運動からプロレタリア運動が熾烈となつて來、マルクスの書物が賣れ、優秀な学生らが左翼思想に走つた。普通選挙となり政黨内閣が出來たけれど原敬暗殺後の政界は動搖し、そして政

黨の墮落腐敗が叫ばれ、一方右翼団体と軍部の結びつきが夕立雲のように擴まり初めた。滿洲事變が起きて來なければならぬ一步手前と言つた頃で、プロレタリアの運動ハ彈壓に彈壓を加えられていた。

さうした日本の内情から見ると在米同胞社會ハ呑氣な社會であつたが、しかし、思想的な雑誌や宗教書などは若い人達に讀まれていた。日米新聞にも労資争議が起つて來たのであつた。労資争議と言つても日本内地のようなせち辛らいものでなかつた。最初ハ四至本八郎^五と言ふ編集局長を中心とした人事問題から起つたのだが、當時の日米財政ハ混乱もしていた。私が歸國してから渡米したような若い記者達は日本のプロレタリア運動の洗禮を受けていたが、私の居た頃から引續き在社していた古株の記者や社員達にハさうした争議ハ争議でなく、單なる感情のもつれであつた。安孫子社長ハ社會主義者でなかつた證據に、さうした争議に對する見通しも意見もなかつた。それぢや資本主義者かと言ふと強慾な金溜め主義者でもなかつた。たゞ晩年の事業として青年時代から描いて來た理想を實現しようとアせる餘りに余裕のない財政から無理な金を引き出したことが社員の反抗を招い

て來たのであつた。

私は竹久夢二と桑港をきりあげることが他の事情から少し延びたので、久しぶりでもあつたし旧友達をあちこち訪ねていた直後一ヶ月程にこの事件が起つたのだ。その間、日米社の旧友とハ懐旧の情を温め、新しい人達にハ先輩としての歓迎を受け、すつかりいゝ氣もちになつていたのであるが、いよいよストライキ断行と言ふことになつて來て社長ハちよつと來てくれと言つて來た。

行つてみると社内ハ社長側にたつものと、反社長側と分れた對立だつたが、どちらにもそれハの理屈があるわけであつた。新聞社の新聞が出なくなつたら新聞社の價値がなくなつて來る。それを出すにハ人であるし、金であつた。方々に借金のある社だから、さうなつて來ると誰も口でハ甘いことを言つているが、いざとなつて出してくれるものハなかつた。しかし安孫子久太郎と言つたら在米数十年、人格者として尊敬されて來た。彼ハ非難される何物ももつていなかつた。何かあつたとしたらそれは彼の理想がいつも高く愚象の上にあつたから、彼らの見解で彼（あれほど）はいくらいで安孫子自身省みて何らやましいところがなかつた。さうした彼に對して平常一度

も交際したことになかつた保坂（五）と言ふ人が数万弗の金を投げだしてしつかりやつて下さいと彼を訪問した。

味方を得たので、新聞を再刊し、そして争議者との紛争を調停する為め是非ともしばらく留つてくれと私ハ懇願されたのであつた。もう六十才を越した老社長の今まで見たことのない弱りきつた表情を見ると、私ハ私の目的を犠牲にしても、何とかして働いてあげねばならぬといふ氣になつた。そして竹久夢二とは外のことで面白くないことがあつたので二人ハ袂を別つことにし、それから満一ケ年に渡つてこの争議に巻き込まれたのである。

この事件を書き出したらキリがないが、誰か外に書く人もあるであらう。ともかくも私ハスタクトン支社をやつていた遠藤照治（五三）君と協議して田舎を廻り、あちこちから金を借りて、どうにか斯（五）うにか新聞を出すようにしたのであつた。そして、今までハ安孫子個人の新聞社であつたものを株式會社にし、もうこれで一安心と言ふことになつた頃ハ私の欧州行旅費ハすつかりなくなつてゐた。そして、ひとり淋しく日本へ引き返して來たのであつた。

其後の安孫子さんハ奮起して人員を整理したり余奈子

夫人も直接出社して経営に當つておられたようであるが、自動車事故があつたり、老境に入られたので往年の氣力もなく、言はば、薄命の中に晩年を終られた。

安孫子さんはどつちかと言ふと世俗の人から非難された人であつた。又世の中にハ少し傑出した人の悪口を言うことは自分の賢さを見せることだと思つているものもある。さういう連中ハ盛んに安孫子、安孫子と言つて攻撃していた。彼らの悪口の多くハ彼らの創作し又ハ妄想したもので、安孫子さん自身とハ縁の遠いことが多かつた。私もさうした悪口を盛んにきかされたものだが、どう觀察しても安孫子さんにはさうした人々のいうような生活がなかつた。若い時代ハどんな人であつたか私ハ全然知らないが、しかし郷黨であり若いときから晩年まで何かにつけて安孫子さんに纏はりついていた鷺津尺魔なども、時々無心のアテが外れて一杯飲むと悪罵などやつたけれど、それハ一時的な激昂からで本心は安孫子さんに敬服し、誰か彼を非難でもすると眞向きになつて弁護に努めた。鷺津尺魔と端々ハ違つていたが、これも安孫

子さんに一生を託したと言つたような島内逆浪など、生活の困難さから、支給の不十分を中心として不平を鳴らすこともあつたが、いざ安孫子の身邊に何かゞ起るとか安孫子攻撃が初まりでもしたら眞つ先に駆けつけると言つた人であつた。結局、安孫子中心に集つた人々は、年を経るに随つて生活も發展してゆくが、献身的に働いた割に物質的な酬え（ごほうぎ）が尠なかつたと言ふのが、安孫子さんからだんだん遠ざかつてゆくようになったように思はれた。それでいて日米新聞社に關係している人達ハ新世界とか其他で働らいていたものよりか、ずつと好遇であつた。しかし、働らいている人々は皆なが皆さうハ思はなかつた。職工などは何十年と日米社だけに働らき、多額の貯金をしたものも尠くなかつた。不平兒というものはどこにでもあるもので、さうした人々ハ別として、私自身安孫子さんを顧みると、あの人ハ自分の名誉とか蓄財とか言つたことで事業をやらうとか社員（社員）の給料を吝（しん）むとか言つた人でなく、會計に金が餘つておればどれだけでも出す人であつた。しかし、その金をあの方は夢の世界に描いていた在米同胞發展という理想の事業に前後のわきまへもなくもち出して行つたのである。

安孫子さんハ求道人であつたし、先駆者でもあつた。しかし、事業家でハなかつたようである。彼自身事業家をもつて任じていたわけではなかつたようだが彼の理想を實現するには事業をやらなければならなかつたのだ。そこに安孫子さんの悲劇があつた。若い頃に何か事業を起し、銀行などをやつて失敗したという話は、いつも攻撃の材料になつていたが、それもあの人ハ計画的に世間を欺かうとしたのでなく、事業を違つただけであつた。その根本思想にハ在米同胞の發展策があつた。

安孫子さん達が渡米した明治十年代ハ在米同胞社會の第一期であつた。そして二十世紀初頭から日露戦争前後の渡米者をもつて第二期とするなら、私などの年輩はそれに屬するのである。第一期時代に渡米した日本人にハ志士的な人や、功名心に燃えた人が多かつた。そして多くハ一二年、長くても三四年で歸國し、日本で旗上げした。實業界に政界に花々しく活動した人達ハ安孫子さんと若い時代の友達が多かつた。言はず有名な諸人物ハ祖國で旗上げしたが安孫子さんはたゞ一人踏みとゞまつて自分の独力で日本人の眞價を發揮しようと言つたのである。日本に歸つた人々は洋行歸りと言つたもので

やされ、その活動の舞台が自ら展けて行つた。だから安孫子さんから見たら「あの男が」と思はれるようなのが忽ち有名人になつていた。彼ハさうした人達のように名譽とか富貴の舞台に花役者たらうという芝居氣が更らになかつた。クリスチャンであつた安孫子さんハ朝夕の食事にハ常に祈りを捧げていた。彼ハ殉教者の傳記を好んで讀んでいたし、人の為め、世の為に生き抜くのだからにも高かつた為め、彼を眞に理解する後輩をその跡に据えることが出来なかつた。

日米新聞社ハ最後の争議で紛糾するまで、幾多の有為な人物を出した。そして移民地に於ける日本人社會に大きな使命を果した。たゞそれだけで終つたら安孫子久太郎ハ世俗的にハ輝きある人であつたけれど、新聞經營を踏み台にして事業を計画し、それが成功しなかつたところに悲劇があつた。しかし、安孫子久太郎は先駆者だつた。今日、その心血を概おぼろいだりビングストンの大和植民地やコーテツ日本人コロニーは安孫子の理想を實現しており、加州の日系人農園の方向ハ安孫子の指導精神を具体化しているのだ。そして彼ハ戦ひ且つ親しんだ排日

家達も安孫子の當時説いたところに来ていたのである。

世俗的に言ったら日米新聞社長としておさまっていたら安孫子さんも楽しんで食つてゆけたのに、だつたが、私ハさうした安孫子さんであつたらこんな思出も書かないであらう。安孫子の眞價ハ貧乏をし通したことであり、そして朝夕同胞發展の爲めに神に祈つていたことであり、在米數十年間一弗の無駄金を使はなかつた。青年時代に買った一弗時計ダライワツチを最後までもつていた。自分が困つても憐れな人があつたら、懐中にあるだけのものを出していた。

岡繁樹君ハどつちかと言ふと安孫子さんとソリの合はない方の人であつた。その岡君が「安孫子久太郎」を編纂して後世に残すと言つて來た。そしてこの人の傳記を作ろうと思つたが事蹟が断片的で纏らないからとも言つて來た。安孫子さんハ自分の傳記など残さうこなど考こいたこともなかつたらう。鷺津尺魔老でも在世中だつたら多少系統だつたものも作れたらうと思ふが、私などの印象も断片的である。牛島謹爾氏とか其他在米關係の人で傳記的なものハあるようだが、如何なる人よりも傑出していた人ハ安孫子久太郎だと私ハ思ふのである。この人を

知つている人の多くハ歸國した。そして死んだ。在米人で彼を尊敬していた人達も殆ど死んだ。そしてあの人ハ新聞には殆ど何も書かなかつた。しかし論説や記事などをよく讀み、自分の意見に添はないときハ編集長を責めていた。が、寫眞結婚問題で日米ハ激しくたちあがつた時、記者達が餘りにも意氣込んだ爲め、自分が言ひ出したことでもあるし困つておられた氣の弱さと言つたような顔が今でも浮ぶ。

安孫子さんが世俗からかれこれ言はれたことハその信念が強かつたからであつた。それでいて人間としてハ氣の弱いところもあつた。

私ハもつと纏つたものを書くつもりであつたが時間がなかつた爲め以上の書き流しになつたことがわれながら残念である。そして暝土の安孫子さんに對しても申わけがないと思ふ。と同時に岡繁樹君の俠氣に敬意を拂う。

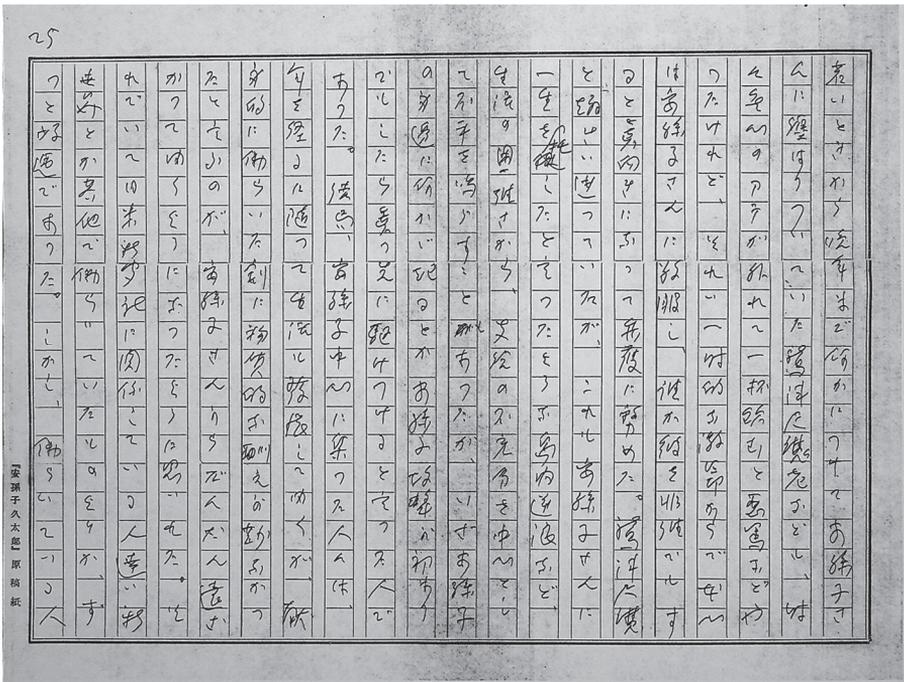
(富山市安野屋町五四)



1915年頃の翁久允と妻キヨ



安孫子久太郎家族 久太郎 長男・康雄 余奈子



「安孫子久太郎翁と私」の原稿

註

- 一 四百字詰の原稿用紙の左下に『安孫子久太郎』(原稿紙)と印刷されている。
- 二 加藤哲郎「反骨の在米ジャーナリスト岡繁樹の1936年来日と偽装転向」(『インテリジェンス』第4号 紀伊国屋書店 二〇〇四)
- 三 一九三六年八月二十三日～二十六日の第一面
- 四 岡直樹・塩田庄兵衛・藤原彰編『祖国を敵として』(明治文献 一九六五)
- 五 「高志人」21巻10月号 p. 54
- 六 到着日付は岡繁樹の加筆と推定される。
- 七 "UCLA Library Special Collections, Charles E. Young Research Library" の "Shigeki Oka Papers" "Box 133, Folder 4 Manuscripts" "9. Okina Hisamitsu [sic.] Abiko Kyutarō o to watakushi [sic.] [Abiko Kyutarō and I], Tokyo, [1956]. In Japanese. 31pp."
- 八 邦文は一九八〇年五月八日～八月三十日、英文は同年九月三日～十一月一日まで掲載。
- 九 Ikuko Torimoto. *Okina Kyūin and the Politics of Early Japanese Immigration to the United States, 1868-1924* (McFarland & Company, Inc., 2017)
- 一〇 サンフランシスコ万国博覧会(Panama-Pacific International Exposition) 一九一五年二月二十日から十二月四日まで開催。久

- 允は同年三月二十日に春陽丸で来米した妻キヨ(一八八六一—一九五一)をサンフランシスコ港に迎え、翌日博覧会を見物。同船には、二百人以上の花嫁たち、所謂写真結婚者が乗船していた。なお、本稿における年譜的事項に関する記載は、別記がない限り逸見久美・須田満編『翁久允年譜 1888—1973 第三版』(公益財団法人翁久允財団 二〇二〇)に拠る。
- 一 久允は、一九〇七年五月十五日に横浜港を出発し、五月三十日にシアトル港に入港した。
 - 二 一九〇四年五月二十五日にヘイト青年会のメンバーが創刊したサンフランシスコの最古の邦字新聞。新聞名は「新世界」、「新世界日日新聞」(一九三二—三三)に変更され、「北米朝日新聞」との合流後、「新世界朝日新聞」(一九三五—四二)となった。
 - 三 まごばら・もごろう 本名：傳吾(一八八四—一九五九) 宮城県生。一八九七年シアトル上陸、「中加時報」「北米時事」記者の後、一九一三年から「新世界」の主筆。一七年帰国後、報知新聞に入社、パリ特派員、外報部長を歴任。久允は、「過去帳」に松原との思い出を綴っている。(「高志人」 25巻8月号 pp. 47, 48)
 - 四 やまなか・きよころう 本名：仲二(一八七八—一九三二) 埼玉県吉川町生。一九〇三年シアトル上陸。一二年日米新聞社入社、主筆兼編集長、欧州特派員を歴任。一七年帰国、衆議院に立候補を考えるも病気で断念。
 - 一五 浅野総一郎(一八四八—一九三〇)が一八九六年に創業した船会社。サンフランシスコ航路を開設したが、一九二四年施行された

排日移民法の影響もあり、経営悪化に陥り、二六年旅客部門を日本郵船に譲渡し貨物船専業となるも六四年解散。

二六 横浜正金銀行、一八八〇年設立、通称は正金（しようきん）。外為業務中心に発達。一九四六年、GHQにより解体され新設の東京銀行（現・三菱UFJ銀行）の前身となった。

一七 うしじま・きんじ 幼名・清吉（一八六四—一九二六） 筑後国三潴郡鳥飼村（現・福岡県久留米市）生、一八八八年サンフランシスコに上陸、スタクトンの荒地を開拓してジャガイモの生産に成功。一九〇八年創設された在米日本人会の初代会長に選出される。

一八 牛島が師事した漢学塾二松學舎の三島中洲が命名した農園「別天地園」による。

一九 久允の蔵書を収める富山市立図書館翁久允文庫には、『別天詩稿』（和装 出版社不明 一九二五）と『別天詩稿 完』（日東之華社 一九二五）が所蔵されている。

二〇 久允は、「牛島翁と安孫子さん」（日米一九三二年十一月十二日・一面（沿岸太平記（55））の中に（この稿を書いている今日（九月五日）私は「別天詩集」をカバンに入れて来なかつたことを遺憾に思ふ。それは、別天翁の詩には、人間としての牛島謹爾氏の風格が目に見ゆるやうに浮んでくるからであつた。私はいつかの機会に、この海外同胞の先驅者である翁に對する感想を新にして諸君に見^{まひ}へたいが、こゝへ翁を引き出したのは、安孫子さんに缺けたところのある性格の美はしさを言ひたいのである。）と記している。

二二 「カリフォルニア州外国人土地法」（ウェット法案）California Alien Land Law of 1913 (Webb-Haney Act)は、一九一三年にカリフォルニア州議會で可決された主に日系人らアジア系移民の土地所有及び三年以上の賃借を禁止した法律。

二二 一九〇三年に安孫子久太郎らが設立した日米勸業社が、〇六年マード郡のヤムとアトウォーターの中間地点にあるリヴィングストンに二八〇エーカー（一五八ha）の土地を購入した。日本人の定住計画の一つとして集団移住による農業入植地の建設を計画して、日本人入植者を集めた。「Yam」と「Atwater」をつないで発音すると「Yamato」に近い音になるので「ヤマト」と名付けられた。（川井龍介：「ヤマト」と名のつく小学校がある米国の町ー「理想」の日本人コロニーが生まれた、リヴィングストン）デイスカバー・ニッケイ (<http://www.discovernikkei.org/ja/journal/2013/9/20/yamato-colony-1/>) 二〇一二年三月八日閲覧)

二三 カリフォルニア州サンホアキン郡の郡庁所在地

二四 「たった80年、ずっと挑戦」（広島朝日広告社のホームページ <https://www.hiroasa.jp/rinen.html>）二〇一一年一月二十五日閲覧）に拠れば（創業者の佐伯卓造は17歳で単身渡米し、10年もの間、語学を学びました。その後、米人弁護士との通訳を請け負う傍ら、銀行から麦酒会社、生命保険会社や通運会社など多岐に渡り、日本人のための代理店として活躍しました。／一九一三（大正二）年、そんな卓造が日本に帰国し、地元広島にて始めたのが、当社の前身にあたる佐伯便利社です）とあるが、一九一〇年十二

月二十四日付「新世界」6面に次の広告がある。(今回左の處に櫻府と連絡し便利舎を設置し左の事務を至極丁寧に廉價を以て御依頼に應ず可く候▲英文翻譯▲代書▲リースの鑑定及び交渉▲賣買周旋▲送預金取次▲貸金督促▲通辨事務▲手紙電報の取次 須市東ラフエツト町四四 廣島旅館の隣 佐伯卓造 44 E. Lafayette St.)

二五 佐伯便利社が一九一四年一月に創刊した雑誌。同年五月シアトル在住だった久允は、スタクトンに転居して同誌の編集に携わることになり、佐伯卓造がサンフランシスコに転居する十二月まで深く関わる。同年一月號から十一月号までは、天理大学附属天理図書館の所蔵で内容を確認できるが、新聞広告に掲載された一五年一月、二月、三月、五月号、「臨時増刊 大博紀年号」は未見で内容確認できない。同年四月に佐伯が帰国した後は実質的に終刊になった。

二六 さいき・たくぞう 広島市生(一八八二—一九七六)。本稿執筆中に卓造・令孫の佐伯正道氏、佐伯祐司氏より卓造の除籍謄本の写、自伝的文章「明治のアメリカ」(掲載誌不詳)のコピーをいただき感謝する。

二七 竹田順一『在米廣島人縣人史』(ロサンゼルス 在米廣島人縣人史發行所 一九二四)、再版『初期在米日本人の記録・第十一冊』(文生書院 二〇〇三)には「太平洋楽」や佐伯卓造に関する言及はない。

二八 はやし・じんのじょう 北海道生(一八八四—一九六〇)。スタク

トン近郊のウッドワード島で農園を経営、一九一二年スタクトン日本人会会長、一六年日米新聞社スタクトン支社主任。帰国後、日本レール(株)を設立、四四年日本鋼管鉱業(株)社長、戦後は同社長。『林甚之丞氏の足跡』(同編輯会 一九六一)に久允は「林甚之丞のこと」(「アメリカ時代」)に掲載している。

二九 こうとくしゅうすい 本名：傳次郎(一八七—一九一一)大逆事件で処刑された一人。

三〇 かたやま・せん(一八五九—一九三三) 片山は、一八八四年から九六年、一九一四年から二二年と二度滞米している。久允は、富山中学校を放校された後に片山の『学生渡米案内』を読んでいる。

三一 かわかみ・きよし 山形県生(一八七三—一九四三) 一九〇一年に渡米して生涯アメリカで過ごしたジャーナリストでキリスト教社会主義者。

三二 あびこ・よなこ 東京生 旧姓：津田・須藤(一八八〇—一九四

四) 父津田仙、母初子の五女として誕生し、一八九〇年須藤家の幼女となる。一九〇七年姉津田梅子と欧米一周旅行をした時に安孫子久太郎を知り、〇九年結婚、久太郎の死後日米新聞社の発行人を続ける。久允は「与奈子」と誤記したが訂正。

三三 久允は、妻キヨの妹石川フサ夫婦がフロリンに住んでいたの、一九一七年に居住したことがあったが、長女三千子が亡くなったこともありオークランドに移住した。

三四 さぎたに・なんきょう 本名：精一 新潟県生(一八八一—一九五九)日米新聞記者。メキシコ特派員も務め一九二〇年に帰国し、

日米新聞東京支社長。帰国前に久允に預けられた鷺谷が筆写した幸徳秋水らの獄中文が、四九年に「高志人」(14巻2月〜4月号)に発表された。

三五 ベヌステイアーン・カランサ Venustiano Carranza (一八五九—一九二〇) メキシコ革命の指導者の一人。一九二一年国防相、一五年大統領

三六 わしづ・しゃくま 本名：鷲頭文三 新潟県生(一八六五—一九三六) 一八九四年渡米、桑港時事社に入社。ユーモア雑誌「臆はづ誌」を創刊。「ジャパンヘラルド」「日米」「新世界」の記者となり、一九〇二年サクラメントに日米新聞社支社設立。二二年在米同胞歴史資料編纂会を設立。鷲頭尺魔の名で『在米日本人史観』(ロサンゼルス 羅府新報社 一九三〇)がある。

三七 スタンプオード大学フーヴァー研究所は、〈邦字新聞デジタル・コレクション〉をインターネット上に開設して、世界中の日本語新聞をPDFで公開している。 <https://hojishinbun Hoover.org>

三八 しまのうち・ぎやくろう 本名：良延(一八七七一—一九四三)。一九〇九年渡米、翌年日米新聞社に入社し、ワトソンビル、オーランド(久允の前任)、フレズノの支社主任、羅府日米新聞社主筆、本社総務部勤務を歴任し、退社後在米日本人会事蹟保存部主事を務めた。ユタ州トパーズ収容所で病死。(島内憲：「フェアネス」を至上の価値とする米国、霞関会 二〇二二年二月五日公開)。
長男・敏郎はロサンゼルス総領事、ノルウエー大使を務め、孫・憲はブラジル大使を務めた。

三九 カリフォルニア州マーセド郡コルテス(Cortes)。「コルテス」は岡繁樹による加筆。リヴィングストン、クレシー(Cressy)に続き安孫子久太郎が一九一八年に開拓を始めた三番目のコロニーで、『在米日本人史』(在米日本人会 一九四〇)によれば、島内良延が総支配人を務め、半年間に三十邦人家族に土地を分譲した。本植民地に関しては、Valerie J. Matsumoto: *Farming the Home Place: A Japanese Community in California, 1919-1982* (Cornell University Press, 1993)に詳しいが、本書には植民を勧誘した島内への言及はない。

四〇 日米新聞社が一九〇五年に第一巻を『在米日本人年鑑』として創刊し、第五巻以降『日米年鑑』として一八年の十二巻まで発行された。(日系移民資料集 第三期) (日本図書センター 二〇〇一—二〇二二)として復刻されている。

四一 日米新聞社編『在米日本人辞典』(日米新聞社 一九二二)が久允を中心に編集された。『日系移民人名辞典(北米編) 第一巻』(日米図書センター 一九九三)として復刻されている。

四二 一九二二年十一月十二日から二二年二月六日までワシントンD.C.で開催されたアメリカが主催した軍縮会議。

四三 オークランドを十月二十日に出発して十二月十八日に戻った。特派員として三十五回の通信記事を掲載した。

四四 徳川家達 とくがわ・いえさと 現・東京都生(一八六一—一九二二) 徳川宗家第十六代当主。貴族院議長として会議の首席全権委員。家達の生母・武子は田安德川家家臣の津田仙の長女で、

- 高井主水の養女となった。武子の実妹の初子が安孫子余奈子の母親であるため、家達と余奈子は従兄妹にあたる。サンフランシスコ南の町サンマテオにある安孫子久太郎墓碑の篆額てんがくは家達の書いたものである。(村上有「安孫子久太郎・排日移民法と戦う」新鴻新報社『続・越佐が生んだ日本の人物』一九六五)
- 四五 かとう・ともさぶろう 現・広島県生(一八六一—一九三三) 海軍大臣、会議では首席全権委員。一九二二年内閣総理大臣になるも、翌年在職中に死亡。
- 四六 幣原喜重郎 してはら・きじゅうろう 現・大阪府生(一八七二—一九五二) 一九一九年に駐米大使、会議では首席全権委員。
- 四七 埴原正直 はにはら・まさなお 山梨県生(一八七六一—一九三四) 会議時には外務事務次官で首席全権委員。一九二二年に駐米大使。
- 四八 一九二四年三月二十四日、サンランシスコからホノルル経由で帰国。
- 四九 一九三一年五月七日横浜港を発ちハワイで滞在後サンフランシスコに到着したのは六月三日。到着日には安孫子久太郎主催の歓迎ダイナーが開催された。
- 五〇 たけひさ・ゆめじ 本名・茂次郎 岡山県生(一八八四—一九三四)
- 五一 ししもと・はちろう 大阪府生(一八九一—一九七九) 一九一五年渡米、新世界新聞社入社、一九九年日米新聞社に転ず。三十二年帰国。『是でも米国か』(新光社 一九三二)等の著書あり。
- 五二 保坂光重 ほさか・みつしげ 山梨県生(一八九一—没年不詳)
- 一九〇三年渡米、クリーニング業を経営。日米新聞社副支配人となり破産手続きを進め、木村松南、翁久允と共に日米新聞社整理実行委員を務めた。
- 五三 えんどう・しようじ 長野県生。一九〇四年渡米、農業に従事した後、一八年日米新聞社入社。二五年日本見学団主事。
- 五四 原稿執筆の一九五六年当時の翁久允居の住所表記は〈富山市安野屋町二三七〉で現在の表記は〈富山市磯部町一丁目一番一号〉である。

〔正誤表〕

・ 15 ページ 上段 本文八行目

新潟県水原郡すいばら（現・妙高市）

新潟県水原郡すいばら（現・阿賀野市）

・ 30 ページ 上段 右側写真の説明文

安孫子久太郎家族 久太郎 長男・康雄 余奈子

安孫子久太郎家族 久太郎 長男・恭雄 余奈子

・ 34 ページ 下段 註四四

（一八六一―一九三三）

（一八六一―一九四〇）

・ 34 ページ 下段 註四四

徳川家達の生母・武子は田安德川家家臣の津田仙の長女
で

徳川家達の生母・武子は田安德川家家臣の津田栄七
（津田仙養父）の長女で